ふるさと歴史民俗散歩

第26回

「幕末宇都宮藩の窮乏を救う――豪商佐野屋の岡本新田開発」

宇都宮伝統文化連絡協議会員　柏村　祐司

東北本線岡本鉄橋の北側、鬼怒川右岸に豊かな水田地帯が広がる。

東岡本と呼ばれる所である。ここは、もと「孝兵衛新田」、または「佐孝新田」と呼ばれ、明治五年、「岡本新田」が行政上の正式名称となり、さらに昭和三十年、「東岡本」となった。孝兵衛とは幕末の宇都宮の豪商菊地孝兵衛（教中）のことで、屋号を佐野屋と称し、佐野屋孝兵衛、略して佐孝ともいわれた。菊地孝兵衛が資金を出して新田開発がなされたことから、孝兵衛新田等と称されたのである。

整然と区画された岡本新田の耕地

岡本新田開発をつとめた菊地孝兵衛の家は、宇都宮寺町で古着屋・質屋を営む商家であった。父、淡雅（孝兵衛）の代に、江戸日本橋元浜町に店を出し、手広く真岡木綿等の買継問屋を営み、江戸屈指の豪商となった。孝兵衛（教中）が佐野屋の家督を継いだのは、父が亡くなった嘉永六（一八五三）年、ペリー来航の年で、同時に二代目孝兵衛を名乗ったのである。

繁栄を続けた佐野屋であったが、二代目孝兵衛が家督を継いだころから宇都宮藩へ納入する御用金、および安政二（一八五五）年の大地震の際の救援復興のための出費等が重なり商売に大きな打撃を受けた。そこで孝兵衛は、世情不安なことから江戸に戦争が起きること等を予見し、江戸の資本を宇都宮へ移すとともに、商業から農業へと経営の転換を図った。新田開発は、その一環である。

岡本新田が開かれた鬼怒川沿岸地域は、大雨のたびごとに氾濫が繰り返され、江戸時代末期まで小松や茅が生い茂る荒地であった。この荒地に、開発の鍬が初めておろされたのは、安政二（一八五五）年十一月十七日のことである。開発の対象となった地域は、約百町歩（百ヘクタール）である。

ところで、孝兵衛が新田開発に着手したころ、宇都宮藩主は戸田氏の時代で、領地は約七万八千石であった。領内には荒地が多く、気候不順もあいまって米の収納が減少し、財政窮乏に陥り、これが年々藩財政を圧迫していたのである。こうした中、孝兵衛より新田開発の申請がなされた。本来、新田開発は、宇都宮藩でやるべきことであったが、財政窮乏、世情不安な中でそれどころではなかった。宇都宮藩は、孝兵衛の新田開発を許可し、県勇記ら係員を任命し便宜を図ったのである。

さて、実際に鍬を振るった入植者は、主に加賀（石川県）、播磨（兵庫県）、因幡（鳥取県）等からやって来た浄土真宗の門徒である。当時、寺請制度が守られていたので、孝兵衛は、懇意にしていた市内浄土真宗寺院観専寺の住職稲木黙雷に彼らの寺請けを託したのである。

入植希望者は、まず観専寺を訪れ、黙雷の諮問を受けてから孝兵衛宅で承認を受け、それから現地へ向かった。現地には掘立て柱、茅囲いの粗末な家が用意され、つき麦一石八斗、味噌二貫目が半年分の夫婦者の配給であった。他に農具代として金三両、馬代四両が渡された。一戸分の土地は二町歩（約二ヘクタール）、これを自力で開墾したのである。

岡本新田の開発は、功を奏し、その功績により菊地孝兵衛は、万延元（一八六〇）年に宇都宮藩から町人でありながら御家来並・七人扶持に取りたてられたのである。

岡本新田の鎮守社旧東海神社（現琴平神社）